

虹

私には英語があった

166 33歳の再スタート



自身が開設した図書館で蔵書を手取る安井さん

「Do you know Cumberbatch? (カンバーバッチはご存じ?)」

英語講師の安井京子さん(64)＝富山市＝が受講生に質問する。カンバーバッチは、ハリウッドでも活躍するイギリスの俳優。シャーロック・ホームズの物語を現代版にリメイクしたドラマが出世作だ。そのドラマが小説化された本を、安井さんは受講生の1人に勧めようとしていた。

教室のテーブルの上にも、棚の中にも本がギッチリと並ぶ。絵本もあれば、ノンフィクション、恋愛小説、ミステリーもある。どちらかといえば、数十ページ程度の薄い本が中心。いずれも英語の本だ。

安井さんが富山市内で主宰する英語の多読講座には、30～70代の男女約10人が通う。多読は語学学習の方法論の一つで、幼児向けなど簡単な語彙の本から段階的にレベルを上げて英語に親しむ。安井さんは特に指導せず、受講生の好みに合わせて本を紹介する。「分からないことを尋ねられたらもちろん答えるけど、いつの間にか皆さん聞かなくなりますね。レベルが合っていれば、ちょっとくらい分からなくても、意外に読めるんですよ」と話す。

11月から受講している70歳の女性は「自分では手に取らないようなものでも、先生に勧められると素直に読めますね」と語る。アンネ・フランクに関するノンフィクションを読み通すのが目標だという。

読むべき本を推薦するにも知識と経験がある。語彙力を超えたものに挑戦しても挫折するだけ。受講生それぞれの英語力や好みを見定める必要がある。

安井さんは英検1級にTOEIC950点、通訳ガイドの資格を持つ英語の専門家。しかし、英語には元々苦手意識があった。

◇

勉強はよくできた。中学校の成績は10段階評価で「10」が多く占めた。しかし、英語だけは平凡だった。思い当たる理由がある。英語担当の教諭が大嫌いだ。その教諭は授業中に安井さんの歩き方をまねて、からかった。「教師なら絶対にやっちゃいけないこと。今思い出しても腹が立つ」。不快な教師が担当する授業など耳に入らない。

中学3年生になって、英語に向き合いたくなった。留学体験記を読み、外国の生活を夢見た。毎日ラジオ英会話を聴き、勉強した。英語の成績はすぐに「10」になった。

高校入学後は世界史にも興味が出た。担当教諭が口にした「民衆が歴史を作る」という言葉が印象的だった。一握りの権力者ではなく、普通の人が世界を変えてきたという意味だ。若い感性に響いた。都内の大学に進学し、歴史学を専攻した。

当時、女性の仕事の口は限られていた。教員は数少ない大卒女性の就職先だった。大学の専攻に基づけば、安井さんは社会科教諭を目指すところ。しかし、卒業後、さらに学士入学し、英語教諭として必要な単位を取り直した。「あの頃、社会科は狭き門。英語の方が教員になりやすかった」

初任地となったのは「殺人以外は全部起こった」という東京の中学校だった。授業中のおしゃべりがやまないことなど当たり前。学校に放火しようとする生徒もいた。想像以上の状況に苦悩したが、教えること

だった。しかし、何か物足りない。打ち込めるものが欲しかった。仕事がしたかった。

教師の経験しかない自分に何ができるのか。英語を教えていたのだから、他の人より英語はできる。しかし、仕事にすると、何か資格が必要だろう。英検1級を目標に、まずは手始めに準1級の試験を受けた。33歳の時だった。

準1級は大学2年程度の難易度。英語教師の経験があれば合格するという思い込みがあった。しかし、結果は違った。「あと一歩」という不合格Aですらなく、「努力を要する」という不合格Bだった。がくぜんとした。1級を狙うレベルですらないのだ。

やる気に火が付いた。早朝に起きて英単語を覚え、子どもを幼稚園に送ってからテキストを広げた。昼食中も英語のニュースを聞いた。全てが英語中心。家事はそれ以



「海を見に」 広田 郁世

や教材の研究にはやりがいを感じていた。

結婚し、息子と娘を産んだ。仕事と育児の両立に苦勞していると、関東出身の夫から「富山にUターンしよう」と提案された。キャリアを中断することにはためらいがあったが、疲れ切っていた。提案を受け入れた。

その年度の終わり。衝突を繰り返していた女生徒が花束をくれた。日ごろの感謝を込めたのだという。精いっぱいやっていることを認めてくれたのだ。彼女を含め、生徒に辞めるとは告げていない。花束を握りしめ、周囲が困惑するほど泣きじゃくった。7年間の教員生活だった。生徒たちが退職を知ったのは新学期になってからだった。

◇

富山に拠点を移すと、育児はしやすくな

外の時間にやった。目標に向かってステップを上ることが楽しかった。それから2年して1級に受かった。

資格を生かしてどうしようか。英語教師以外のことに挑戦してみたかった。通訳は交流人口が多い都会以外では需要がある仕事ではない。それなら翻訳はどうか。しかし、自分のレベルに合った仕事を得る筋道が分からない。小さな翻訳業務をほそぼそと受けながら、悶々とした。

「情報交換しませんか」。図書館にビラを貼った。こんなもので誰かから連絡が来るのかと自分でも半信半疑だった。しばらくして、メールが届いた。翻訳を勉強している女性だという。さらに、ぼつりぼつりと連絡が来た。

皆、通訳や翻訳に何らかの形で携わっていた。定期的集まり、悩みや仕事の情報を分かち合うようになった。互いに仕事を融通し、大きな仕事は協力し合った。つながり合うことで、それぞれが成長した。

「私は人を率いるような性格ではないのだけど、不思議と英語の集まりは仕切れた。目的と属性がはっきりしていたからでしょうね」。集まった人たちの体験談や、仕事を獲得する筋道をまとめて書籍化した。英語で身を立てたい人にノウハウを提供したかった。タイトルは『女は英語でよみがえる』。編集者の提案だが、「大げさなタイトルだ」と恥ずかしかった。しかし、重版を重ねて、英語を学びたい人が手にした。本の影響か、翻訳の仕事も増えた。講師の仕事も舞い込んだ。英語が人生を支えるつえに育った。

◇

さまざまな学習法を試すうちに、大量の活字に触れて英語に親しむ多読にたどり着いた。2008年から自身でも講座を開いた。講座で使う書籍を自費で集め、6000冊近くになった。

60代に差し掛かり、「そろそろもういいだろう」と仕事を減らした。両親が相次いで亡くなった。生まれ育った愛着ある実家をただ壊すのも忍びない。そこで蔵書を生かし、「家を図書館にしよう」と思い立った。公立図書館は多読の入門に適した本を多く所蔵していない。講座を卒業した人が集う場にもなる。図書館には「Goodie(すてきな物、主人公などの意味)」と名付けた。

最初から多読講座に通っていた人たちの中には、安井さん以上の洋書愛好家がいる。そんな人々と本の情報を交換するのが楽しい。コロナ禍でもZoomを通じて、最近読んだ本を紹介し合った。「私は仲間をゲットするために英語を始めたのかもしれない」。思えば、何とか英語で身を立てられたのも、仲間の存在があったからこそだ。

安井さんはウォルト・ディズニーの言葉が好きだ。「If you can dream it, you can do it(夢見ることができれば、実現できる)」

安井さんは「英語は世界を広げる窓」と言います。確かに一瞬で世界とつながれる今、使えるのが日本語だけというのはもったいない。英語を勉強し直そうと試みたことは何度もありますが、いずれも失敗に終わっています。今思えば、見えを張って自分のレベルを超えたものに挑戦したのが良くなかったようです。今度こそ。



「虹」第8巻 販売中

最新刊の第8巻「虹 誰もいないから両手を広げた」は、北日本新聞連載の141～160回目までの20話を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076(445)3352(平日午前9時～午後5時)。

心があたまのエピソードや、この紙面についてのご意見・ご感想をお寄せください。

〒933-0911 高岡市あわら町13-50

北日本新聞社西部本社「虹」係

FAX 0766-25-7773

mail niji@kitanippon.jp

次回掲載は3月1日(水)です。

紙面提供/人と鉄のあいだに

OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作/北日本新聞社
メディアビジネス局